

統合幕僚長 岩崎茂空将と永岩俊道同窓会長との懇談 (平成25年12月26日(木) 統合幕僚監部統合幕僚長室にて)

<師走の懇談>

平成25年も師走の暮れとなる12月26日(木)午後、永岩俊道同窓会長は統合幕僚長岩崎茂空将を表敬訪問し、防衛大学校同窓会に係る懇談を行った。岩崎統幕長は同窓会副会長でもあり、先般の防大開校祭(11月16日)時には、國分良成学校長、齋藤隆第2代統幕長(前同窓会長)、折木良一第3代統幕長とともに「防衛大学校の新たな高みを求めて」と題した、防衛大学校の過去と現在を見つめ将来を展望するパネルディスカッションに臨んでいた。

今回は、昨今の難局に対処しつつ活動する現役自衛官最高位の立場から、開校祭パネルディスカッションに引き続き防衛大学校同窓会に対する示唆をいただくため永岩会長との懇談が行われた。

<懇談内容>

岩崎統幕長と永岩会長は共に空自の戦闘機操縦者であり、かつて主力戦闘機F-15の飛行隊長として北辺の防空の要である千歳基地で共に勤務した。千歳基地は昭和33年に空自で最初の対領空侵犯措置の任務について以来、全戦闘機部隊においても最多の領空侵犯対処回数を数え、空自のスクランブルに関わる姿勢を具現しつつ多くの経験と伝統を築いてきた。その共通の想いが基調にあるためか、懇談は昨年11月に中国が突如設定した「東シナ海防空識別区」の話題から始まった。



～国際人たるべし(英語力による意思疎通)～

永岩会長

(中国の「東シナ海防空識別区」設定に関わる会長執筆の英文レポートを手渡ししながら)

「防空識別区の話は日本国内のみで止めておいてはならないと思います。今回の件で、中国が如何に暴挙を為したかということ、日本が如何に国際標準のやり方に則って冷静に対応してきたか等、日本の主張を正しく世界に発信することが非常に大事だと思います。この英語の論文は、

「Technical Aspect of ADIZ(防空識別圏に関する技術的視点)」というタイトルで、防空識別圏の国際標準の見方を英語で説明したのですが、国際問題研究所の海外向けコラムとして1月から掲載予定です。ちょっと読んでみてください。英文独特の表現等、安全保障に関するレポートだけに気を使います。

現役の若い尉官から佐官の頃は、飛ぶことに懸命で日々過ごしていましたが、あの頃から、もっと英語を勉強しておけば良かった。いや、防大の学生時代から勉強しておけば良かったと強く思います。」

岩崎統幕長

「確かに現在の自衛官特に幹部自衛官は国際人としての活動が要求されます。PKO、国際緊急援助はもとより、先般の東日本大震災時に米軍が実施したトモダチ作戦においても円滑な連携を図



る上で、英語力は死活的な要件でした。同盟国である米国のみならず、それ以外の国々とも明確で誤解無き会話を継続していく必要があります。これからの幹部自衛官は国際的な視野と会話力を必死に身に付ける覚悟を持つべきです。防大の学生にとって、英語力の錬磨は極めて重要です。」

永岩会長

「先日、化学兵器禁止機関（OPCW）の初代査察局長を務めた秋山一郎君（防大15期で会長と同期生）がオスロで12月10日に行われたノーベル平和賞授賞式から帰国し、平和・安全保障研究所の月例研究会において講演をしていただきました。

その席上で、若き後輩諸君へ伝えたいこととして、英語による意思疎通の重要性を挙げていました。国際機関において数十カ国のスタッフをまとめ危険な地域で活動の成果を得る上で、英語力はまず何にも増して重要だったと語ってくれました。その英語力は、米国の大学院に留学中、決して留年してはならぬと必死の思いで磨いたものだそうです。」

岩崎統幕長

「何事も成し遂げるためには、背水の陣、不退転の想いがなければ出来ません。英語力も同じでしょう。

私もこの頃は、外国メディアの取材をよく受けますが、可能な限り英語で対応する様に努めています。家内などは『あなたが英語を話しているつもりでも、映像に英語の字幕スーパーが出たらどうするの』と茶化しますが、英語力も本当に若い時代からの積み重ねが大切だったなあと思います。防大の学生諸君、若い幹部自衛官の諸官は、将来の国際人たるべく頑張ってもらいたいです。」

～好きな事に全力投入（統幕長の学生時代）～

永岩会長

「先般のOPCW初代査察局長秋山君にもお願いしたのですが、『若き後輩諸君へ』と題し、お話を伺う方々の若い時代の姿をお聞きしています。統幕長はどのような学生時代を過ごされましたか。」

岩崎統幕長

「私の学生時代は決して褒められたものではありません。興味の無い事にはあまり意を払わず、学生舎生活も訓練も程々の対応でした。しかし、好きなもの興味がある事項については、本当に全力投入しました。

航空工学専攻だったのですが、『大空への憧れ』からか航空工学だけは懸命に勉強しました。授業だけではとても理解出来ず、それこそ留年せず先生の講義についていくため必死でした。先程、お話のあった秋山さんと同じです。消灯後も無断で自習室を使用し、当直幹部からは何度も注意処分を受けました。ある意味で、指導官から見れば扱いづらい学生だったと思います。

校友会はグライダー部です。この校友会活動こそ大空への夢を紡ぐ青春そのものの日々でした。お蔭で現在、グライダー部のOB会長を拝命しています。実は、防大の陸海空各要員別の訓練において、陸海の要員は良き伝統に根差してそれぞれ特色のある訓練を実施してきましたが、航空要員の空に係る訓練はやや曖昧なものでした。現在は、全員がグライダー操縦の訓練を行う態勢が整い、航空機の操縦、整備、気象等についても、グライダーに搭乗する訓練を通じて体験出来るようになりました。その態勢整備の過程で、私もグライダー部のOBとして若干なりともお手伝いする事が

出来ました。航空要員として大空を舞台として、各種の役割を支える醍醐味を感じてもらえればと思います。

小原台の生活も、任官以降の自衛官人生もきつく厳しい道程ですが、「好きこそものの上手なれ」の言葉の通り、情熱を傾けるに足る好きな事柄がその道程に見つかれば、しめたものです。私は、防大時代から大空への憧れに根差し、航空工学やグライダーに没頭し、自衛官人生も戦闘機パイロットとしてスタートすることが出来ました。現役自衛官としては最年長となりましたが、その原点は、好きな事、興味のある事を発見出来た小原台時代に遡ります。」

～統合運用と防衛大学校（陸海空要員を繋ぐ絆）～

永岩会長

「統合運用は未だ道半ばの状態、統幕長としても御苦労の多いことと拝察します。防大は陸海空の要員を共に教育するという、世界の士官学校においても大変ユニークな存在ですが、統合運用と防大の関係についてどのような印象を持たれていますか。」

岩崎統幕長

「統合運用が開始されてから7年半経ちましたが、実は、諸外国から大変羨ましがられています。各国共に統合運用の重要性は十分認識されているものの失敗している例も多いのです。各国は内心『お手並み拝見。統合運用は簡単ではないよ。』と自衛隊の統合運用開始の様子を見ていたのではないのでしょうか。

ところが、東日本大震災時における統合運用では、全体としては非常に円滑整齊と対処出来ました。米軍サイドも驚いていたと思います。

その成功の要因の一つに陸海空要員を共に教育する防大の存在が有ることは明らかなです。4年間同じ釜の飯を食べ、青春時代を過した体験と記憶は大変貴重なものです。また、一般大学出身の幹部も各自衛隊の同期生としての繋がりから、防大出身の幹部を媒体として自然に陸海空の垣根を乗り越え、各自衛隊間の相互理解を深めていきます。

統合のあるべき姿の例として『こし餡と粒餡』の話がされますが、目指すべきは『粒餡』でしょう。各自衛隊はその活動するフィールド毎に鍛え上げ形成された価値観、伝統、組織風土すなわち『粒』があって当然です。無理やりその粒をこす必要はないのです。統合運用にとって大切なのは、陸海空毎に造り上げた味わいのある『粒』を相互に理解しようとする想いです。相互理解を可能にするベースには、相手に対する信頼、共感、共通の思い出等がありますが、小原台にはそのベースが全て整っています。」

～OB・OGの同窓生に対する期待（自衛官人生の先輩として）～

永岩会長

「防大同窓会の半数近くは、既に自衛官人生を卒業したOB・OGで構成されていますが、現役の御立場でOB・OGの同窓生に期待する事項はありますか。」

岩崎統幕長

「OB・OGの同窓生の方々は、大部分の方が数十年にわたって自衛隊の部隊や司令部等の現場で組織を支えて来られた経験を持たれています。その経験に裏打ちされた意見やお話には、誰もがなるほど、と頷く重みと説得性を有していると思います。残念ながらOB・OGの方々が隊友会に入る比率は決して高いものではなく、なかなか世間に傾聴される声を生成するには至っていません。」

翻って、防大同窓会には、OBの同窓生も大部分の方が入られており、安全保障のオピニオン・リーダーとなられている先輩はじめ、各方面で積極的に活動されている方々も大勢おられます。しかも、それぞれの自衛官がどのような勤務環境でどのような悩みと向かい合いながら任務を遂行しているか十分承知されています。更に、都会、僻地等を往来する転勤等々自衛官の勤務の特殊性に起因する家族の想い、子弟教育等についてもその喜びと痛みを共に経験されています。

近年の自衛隊の活動は、活動の成果を問われ、その活動範囲もグローバルなものとなりました。ニュース等メディアに取り上げられる機会も増えています。しかし、時としてその内容が必ずしも実態を正しく捉えたものではなく、現場の自衛官及びその支えとなる家族の思いまで映し出せていない場合も散見されます。防大同窓会の先輩諸兄が、その様な場合に自衛官と国民の皆さんの間の橋渡しとして、各方面に自衛官及びその家族の人生と生活の実態を伝えるべく御尽力いただければ幸いです。

その様な情報発信のパイプが重層的に為ればなる程、自衛隊に対する真の理解も深まり、自衛隊の活動も実効の度を増すのではないのでしょうか。」

～防衛大学校に対する期待（卒業生の足跡）～

永岩会長

「統幕長は防大の４学年にお話しをされる機会があると伺いましたが、防衛大学校及び在学中の学生諸君に期待するのはどのような事でしょうか。」

岩崎統幕長

「自衛隊の歴史も６０年余、一番弟分の空自も平成２６年で６０周年を迎え、グローバルな活動の端緒となったPKO活動開始からも２１年が過ぎました。その時の流れの中で、防大を卒業した多くの同窓生が様々な礎を築き育て、今日に至っています。その道程にはいくつもの峠があり、苦難を越える渦中で多くの喜びと哀しみが生まれました。これらの足跡をしっかりと記録に残し、連綿として続く防大の記憶に留めることが大切です。

自衛隊は常に１０年、２０年先を見据え新たな峠を越えて行かねばなりません。その中核として歩んできた防大卒業生の足跡は、これから険しい峠を登ろうとする若き後輩達に、大いなる勇気と決意を持たせることが出来るでしょう。」

永岩会長

「先般、國分防大校長とお話した際に、全く同じ事を言われていました。学校長は、学生の全人格的な成長を願いつつ御自身も『私は２１期生と同期です。』と言われる程、防大の歴史と共に歩まれようとしています。その学校長が『卒業生の足跡』をしっかりと防大の記憶に留め、学生が共有出来る態勢を整える事が喫緊の課題だと言われました。同時に、防大同窓会に対しても、卒業生の足跡を整理する過程での支援を依頼された次第です。

今後、日本にとって予断を許さぬ状況が続くと思われませんが、軸足を定め将来を見据えながら新たな礎を築くためには、過去から現在までの足跡を辿ることも大変重要だと言うことでしょう最後に、勉学訓練に励み、これから任官し同窓生となる防大在校生に御助言をいただければ幸いです。」

岩崎統幕長

「既にお話した内容の繰り返しとなりますが、２つの事を述べさせていただきます。

一つ目は『国際人たるべし』という事です。英語力の錬磨のところでも申しました様に、多様な活動を国際的な視野の中で展開していく事を現在の自衛隊は求められています。その中核となる幹部自衛官は、国際人としての自覚と様々な国の人達と伍していける資質の錬磨が是非とも必要です。

例えば防大を卒業した幹部がPKO、国際機関あるいは大使館等で勤務した後に、防大で教育に携った場合、外国の親交を深めた友人が「あいつは日本に戻り、防大で勤務しているそうだ。日本出張に合わせ、旧交を温めに行こう。」とやって来てくれるのです。その交流を後輩が見て「俺も頑張っ、国際的な環境で活躍したい。」という動機付けが出来、国際人たるべしとする想いが引き継がれていきます。その様な地道な努力の積み重ねの結果として、自衛隊と諸外国軍隊との信頼醸成が進んでいくのではないのでしょうか。

二つ目は『初級幹部はその道を極めて粒となれ』という事です。私はパイロットを目指しましたが、それぞれの学生が第一線の現場において活躍する自分自身の姿を思い描いているはずで、空自を例に取れば、パイロットのみならず、管制、高射、整備補給、通信電子等々の現場においてその道を究め、根を張ることが大切です。統合運用における『粒餡』とは、陸海空のそれぞれの分野でその道を極めてこそ成り立つものです。根なし草では何も生じません。真理は現場に宿るものです。自衛官の活動する現場に夢をさせ、その道を極めるべく志を育んでいく様に祈念しています。」

永岩会長

「本日は、大変御多忙な中、お時間を頂き、防大同窓会に対する示唆をいただき有難うございました。今後とも現役唯一の同窓会副会長として御助言いただきます様、お願い申し上げます。」

<懇談を終えて>

統幕長室の静謐な空間の中で、統幕長と会長の懇談が進められたが、その内容は多岐にわたり極めて密度の濃いものであった。ユーモア溢れる語り口でなごやかな雰囲気醸しつつ話題は進んだが、時あたかもフィリピンの国際緊急援助活動の終了と南スーダン情勢の緊迫化が同時進行する中で、『国際人たるべし』という統幕長の語りかけが心に響く内容となった。

(同窓会広報担当 杉山伸樹記)

